

資料

J・C・ガムユノフ

アジア・アフリカ諸国における  
資本主義発生史にかんする討論

一九六一年四月三・四日にソ連邦科学アカデミー・アジア諸民族研究所において、同研究所の学者会議歴史学部会の定例会議がおこなわれたが、この定例会議は、ソ連邦科学アカデミー歴史学部会付属の資本主義発生史の問題にかんする科学会議と合同でおこなわれ、東洋諸国における資本主義の発生史の問題をとりあげた。

この定例会議をひらいたソ連邦科学アカデミー・アジア諸民族研究所学者会議歴史学部会主任のエム・ア・コロストフツェフは、ソ連邦科学アカデミー歴史学部会付属の資本主義発生史の問題にかんする科学会議を指導しつつあるアカデミー会員エス・デ・スカスキンは、合同学術会議の仕事を指導するように要請した。

エス・デ・スカスキンは、審議される問題が大きな理論的意義をもっていること、ヨーロッパ諸国その他の地域の歴史をとりあつかう研究者たちと東洋史家たちとの協力が重要であること

とを、簡潔なことで強調した。エス・デ・スカスキンは、一連の諸問題、とくに(1) 植民地侵略に先行するその歴史的發展の時代にアジア諸国では資本主義の自生的發展があつたかどうか、(2) いわゆる原始的蓄積の過程はアジア諸国ではどのようにおこなわれたか、(3) どのような形態で資本主義的生産が実現され、東洋諸国では資本主義發展のマニユファクチュア時代が存在したかどうかという諸問題を、会議の参加者たちのまゝに提起した。

ヴェ・イ・パヴロフが、インドの資料にもとづいた基調報告をおこなった。報告者は、彼の意見によれば「資本主義の発生」という概念は、資本主義の諸要素の誕生からはじまり資本主義的經濟制度の形成におわる社会經濟的發展段階をとらえるものである、と強調した。インドにかんする資本主義の發生の時代は、年代的には一七世紀おわり―一八世紀はじめから一九世紀の七〇―八〇年代までに報告者は限定した。

ヴェ・イ・パヴロフはさらに、西欧資本主義列強の植民地・半植民地に転化する以前における東洋諸国の社会經濟的發展の水準にかんする討論（『東洋学の諸問題』一九六〇年第四号、四〇―六三ページ、一九六一年第一号、二〇五―二一六ページ〔本誌第五集第二号（通卷一二三号）、一一五―一四七ページ、本誌第三六卷第二号（通卷一二九号）、八五―一〇六ページ）を参照せよ）で論争をひきおこした諸問題に注意を集中した。社会的發展のすべての基本的諸要素の總体的研究が必要である

という自己の従来からの方法論的原則を固守しながら、それとともに報告者は、そのとりあつかいかたに一連の精確性をもちこみ、史料の研究にもとづいた補足的論証をあたえるためには、個々の諸問題を分離することが必要であると考えた。

国家的封建的所有の私的封建的所有への転化の問題をこの関連において検討したのちに、ヴェ・イ・パヴロフは、このような転化の傾向を具体的な歴史的諸条件において考察して、マイソール人、シック教徒、マラータ人の諸国家の土地所有が復活した一八世紀においては、以前には多くのばあいに強奪戦争の物質的支柱をなしていた国家的所有は、これまでにはけつてしまったことのないすでに別の機能的意義を獲得した、すなわち、民族的基礎にもとづく国家の強固化の物質的基礎となったという結論に達したのである。ヴェ・イ・パヴロフの意見によれば、この点に、土地所有諸形態の進化におけるあたらしいなものかが存在したのである。

さらにヴェ・イ・パヴロフは、共同体の現物的封鎖性の解体はどのような段階で、なにゆえにおこなわれるかという問題を検討した。インドにかんしては二つの見解が提起されていた。カ・ア・アントノーフは、共同体の現物的封鎖性の引裂を、アクバル治世下の貨幣地租の実施と多くの点でむすびつけた。エリ・ベ・アラーエフは、この引裂は、一定のカテゴリーの手工業の独立化、なによりもまず、共同体の構成員からの織匠の分離とむすびついていると考えている。ヴェ・イ・パヴロフの

意見によれば、共同体の現物的封鎖性の破壊は、封建制度それ自体の発展と一定の関連がある。いいかえるならば、私的封建的所有の強化自体、土地関係の封建的發展過程自体が共同体の封鎖性を破壊した、より正確に言えば、この封鎖性の破壊を準備したのである。とはいえ、この過程を深化させたのは商品・貨幣関係である。報告者は、この多かれ少なかれ確実性のある仮説を確認するために一連の興味深い史料を引用した。

植民地的奴隷化以前のインドにおけるあたらしい社会経済的諸現象の総体を検討したうえで、ヴェ・イ・パヴロフは、インドは国全体としては発展した封建制度の水準にあったという結論に達した。この見解は、ときには他のインド学者たちの若干の定式化、とくに、ムガル諸大王の治世下のインドは後期封建制度、すなわち、資本主義的経済制度がすでに形成されなければならぬ時代の水準にあったというカ・ア・アントノーフの意見とくいちがうばあいもある。資本主義的経済制度の存在を確認する諸現象はみだされないのであるから、われわれは、イギリスによる侵略以前のインドにおいて存在していたのは発展した封建制度であるという考えかたを固守する、とヴェ・イ・パヴロフは強調した。ヴェ・イ・パヴロフの意見によれば、発展した封建制度の指標はつぎのようなものである。すなわち、私的封建的所有が強固になったこと、共同体の現物的封鎖性と共同体の土地利用が解体しはじめたこと、都市および農村の商品関係と手工業における資本主義の諸要素とが成長し、政治的

領域についていえば、民族的基礎にもとづく国家が形成されることである。

ヴェ・イ・パヴロフの報告の第二の部分は、一八世紀のなかばから一九世紀のなかばまでのインドにおける社会経済的諸過程の本質的分析をとりあつた。イギリス人の治下における土地関係の変化の性格を評価して、報告者はつぎのように述べた。すなわち、彼の意見によれば、イギリスの農業・土地政策はその本質の点では、一八世紀なかばのインドではもはや全体としては歴史的にすたれた現象であつたところの国家的封建的所有を復活させようとするところみであつた。この点に、イギリス植民地主義者の農業・土地政策の歴史的に逆行的な役割があつた。報告者の見解は、二つの租税上の組織——ライヤットワールとゼミンダール——のイギリス人による実施は基本的にブルジョア的な方策であつたと主張するカ・ア・アントノヴァの意見とくいちがっている。ヴェ・イ・パヴロフは、土地・租税政策の過程とこれにつづく租税的強奪の過程での農民の零落は、本質的には原始的蓄積、すなわち、農民層の生産手段の——なによりもまず彼らの土地の——収奪であつたというエル・ア・ウリヤノフスキーの意見との不一致をも表明した。

つづいてヴェ・イ・パヴロフは、社会的分業の水準と、この過程の発展にたいする植民地的抑圧体制の影響にかんする問題を検討した。報告者が指摘したところによれば、農民のもとからの剰余生産物および必要生産物のいちじるしい部分さえもの

とりたては、封建時代に形成された社会的分業体系を破壊した。農民は、このようなおそるべき抑圧をこうむつたので、都市手工業の生産物のなほどうか有望な消費者としてあらわれることができなかった。それだけではなく、インドの海岸周辺に存在したか、あるいは封建領主の必要の保障をめあてとする生産とむすびついた手工業諸中心地は、一方では従来の封建領主<sup>11</sup>注文主を一掃し、他方ではインドの港町手工業者の対外連関を引裂いた植民地侵略の過程で大きな損失をうけた。商人階級と金貸業者との一部分も、封建的名門の一掃から被害をうけた。それとともに、ヴェ・イ・パヴロフが指摘したところによれば、すでにこの時代においてまず第一に貿易中心地と都市で形成されつつあつたインド商人階級の買弁的要素とイギリス資本との経済的なむすびつきが、この当時に強化・拡大されていく。

販路市場へのインドの転化の時期の問題にふれて、ヴェ・イ・パヴロフは、一九世紀の前半にはこの過程はまだやつともく、まればかりのところである、と強調した。いうまでもなく、これの帰結があらわれるのはもっとあとになってからである。ヴェ・イ・パヴロフの意見によれば、一九世紀の後半でさえもインドは、農村においては現物経済が優勢であつたところのまだいちじるしく封建的な国であつた。しかし、七〇—八〇年代にはすでに資本主義的な経済制度が発生する。インドの資本主義的経済制度の形成の特質は、報告者の意見によれば、つぎの点にあつた。すなわち、資本主義発展が大規模な工業と小規模

な工業とで同時におこなわれ、しかもインドの小営業における資本主義の広範な發展は、七〇—八〇年代に、すなわち、工場と企業経営とはじめて出現したときよりもいくらかおくれで開始されるのである。インドの小規模生産は、報告者が指摘したところによれば、買占人の重圧のもとで生産者にとって最低・最悪の種類の資本主義的生産が優勢であることを特徴としていた。ヴェ・イ・パヴロフは、過去においてインドの諸営業は極端に不利な条件のなかでどのようにして發展したか、なにが手工業自体の内部における資本の蓄積を破壊したかということによって、買占人の重圧を説明する。手工業者のなかからの企業家的資本家の分離は、インドではひじょうに制限された規模でしかおこなわれなかった。資本家になったのは買占人である。ヴェ・イ・パヴロフは、民族産業にとつての資本主義的信用がインドにおいて欠如していたこと、および、手工業者の搾取にたいしてイギリス資本が間接的ではあるが、しかしひじょうに強力に参加していたことによつてもまた、買占人の重圧を説明する。

おわりに、七〇—八〇年代のインドにおける資本主義的経済制度の存在を確認するにあつて、報告者はこの現象のいくつかの指標をあげた。ヴェ・イ・パヴロフは、この時期には農村では、販路市場および原料供給地への国の転化を土台として、小商品的経済制度の形成がおこなわれるとのべた。ところで報告者の意見によれば、この小商品的経済制度のなかに、インド

の資本主義的發展の傾向がもっとも強力にあらわれていたのである。さらにヴェ・イ・パヴロフがのべたところによれば、工場および企業経営のかたちでの資本主義的生産や手工業が發展するとうような、直接的に資本主義的な経済制度の物質的前提条件が発生する。この時代には近代的な運輸、鉄道、通信手段の創設がおこなわれ、最後に、イギリスの諸銀行というかたちでの資本主義的信用が発生する。報告者が強調したところによれば、原始的蓄積の過程は、インドでは幾十年もにわたつておこなわれ、現在までも継続されつつある。

ヴェ・イ・パヴロフの報告に於て若干の同志が討議のなかで発言した。発言のなかには論争的性格をおびたものもあり、また、審議された問題の個々の側面の積極的説明をおこなつたものもあつた。

エリ・ベ・アラエフの発言は要するに、植民地的奴隷化以前のインドの發展水準の問題にかんするものであつた。報告者は、昨年この發展水準の問題が審議されたさいに展開された論争を事実上は継続させた。エリ・ベ・アラエフは、社会経済的發展の水準にかんする問題を解決するためには、所有形態の交代を研究することが第一義的な意義をもっているという意見をのべた。所有形態の進化にかんするヴェ・イ・パヴロフのテーゼに反論して、エリ・ベ・アラエフは、国家的所有が崩壊し私的封建的所有が形成される傾向はみられない、と主張する。あらゆる注意を国家的封建的所有の私的封建的所有との交代の

問題の研究に集中する研究者たちは、単一の封建領主階級内部の種々様々なグループのあいだの相互関係のうえに研究の重心をうつしている、とエリ・ベ・アラージェフはのべた。エリ・ベ・アラージェフは、もしも所有形態の交代が一方における封建領主と、他方における農民とのあいだの相互関係における変化をもたらずと考えるのであれば、要するに、このことが具体的にしめされなければならない、と明言した。さらに、エリ・ベ・アラージェフはその発言のなかで、一六一一—一八世紀のインドにおいて直接生産者の搾取形態と彼らの地位とに生じた諸変化、そして、インドの農村共同体の進化とそれらの諸形態とをくわしく検討した。

会議において発言したイ・ゲ・ポズドニャーコフ（ゴチックは訳者）は、日本では一七世紀全体は、封建制度の高揚のしるしのもとに経過したと指摘した。日本において封建制度が衰退しはじめるのは、元禄期——一七世紀と一八世紀との境目——であった、とイ・ゲ・ポズドニャーコフは考えている。資本主義発生史の問題に直接にふれて、彼はつぎのように指摘した。すなわち、一九世紀のなかごろに日本では、小商品生産と資本主義的家内労働との広範な普及がおこなわれる。だが、マニユファクチュア、とくに集中マニユファクチュアの発展は、この時期にはかなり弱かった。

イ・エム・スミリャンスカヤは、資本主義の発生がすでに生じた時代に土地所有の領域において東洋諸国で生じた諸変革に

かんする問題について発言した。イ・エム・スミリャンスカヤの意見によれば、ヴェ・イ・パヴロフによって国家的封建的所  
有形態の私的封建的所有との交代傾向として指摘されているものは、いずれにせよ一連の近東諸国ではじっさいにはみいだされない。イ・エム・スミリャンスカヤは、この仮説は方法論上の点で非生産的なものであると考え、彼女は、資本主義発生史の研究にさいしては土地所有形態の問題の役割を過大評価してはいけない、と明言した。

ア・ア・イスケンデロフは、植民地化されるまでの東洋諸国は、まさに資本主義的發展段階の方向に發展しつつあったけれども、まだこの段階に達してはいなかったという報告者の基本的結論に同意した。ア・ア・イスケンデロフは、資本主義発生史の問題の研究たちは、あらゆる他の諸問題の合成物のなかで、第一番に都市、都市手工業、マニユファクチュアなどの發展に注意をむけなければならないとのべた。ア・ア・イスケンデロフの意見によれば、東洋諸国の社会經濟的發展水準を確定することは、資本主義そのものの發展過程自体を説明するためには重要ではない。さらにア・ア・イスケンデロフは、アジア諸国における資本主義発生史の分析にさいしては、アジア諸国にたいする植民地主義的影響を考慮し、植民地・従属国の經濟的發展における植民地主義的影響の役割を全面的に研究しなければならない、と強調した。

会議において発言したゲ・ヴェ・アコポフ（エレヴァン）は、

近頃東洋諸国における資本主義發生史の諸問題は、民族解放運動の社会経済的前提条件の研究と関連して、アルメニアの学者たちの注意をひきつけてきたと伝えた。アコポフは会議参加者たちのまえに、説明を必要とする一連の諸問題、とくに、所有の具体的諸形態の問題を提起した。

エル・ア・ウリヤノフスキーは、東洋、とくにインドにおける土地所有形態の進化にかんする問題でその発言では、ヴェ・イ・パヴロフの意見と一致した。それとともに彼は、ときには研究者たちが、一見したところもつとも単純ではあるが、しかし最高度に深遠な東洋での社会経済的・歴史的な現象、すなわち、封建的地主経営や、「土地所有の爵位性」や、農奴制度が欠如していることを過小評価しているばあいがあるということに注意をむけた。エル・ア・ウリヤノフスキーは、東洋における資本主義の先行者としての東洋的封建制度は、西ヨーロッパもしくはロシアにおける封建制度がもっていなかったか、あるいはほとんどもっていなかったような諸特質をもっていたと強調した。エル・ア・ウリヤノフスキーの意見によれば、資本主義發生史の設問は、ヨーロッパ列強の植民地侵入以前の時期にのみ関係させてはいけない。東洋における資本主義の發生は、以前から生じていたがヨーロッパ人の侵入によって中断されたところの内的な自生的諸過程によつてもたされると同時に、ヨーロッパ人の侵略によつていちじるしくひきおこされたものもある、とエル・ア・ウリヤノフスキーはのべた。エル・ア・

ウリヤノフスキーは、アジア諸国における資本主義の發展過程を特徴づける一連の諸特質を詳細に分析した。

ゲ・ゲ・コトフスキーは、インドにおける資本主義的經濟制度の發生にかんする問題にふれて、この過程は一九世紀の三〇—四〇年代からはじまった、とのべた。ゲ・ゲ・コトフスキーの意見によれば、この時期まではインドでは、国の個々の中心地で個々の生産部門において散在的に發生した資本主義的生産の諸要素だけが存在したにすぎない。このばあいゲ・ゲ・コトフスキーは、一八世紀後半—一九世紀はじめに手工業において生じた諸過程が、研究者にはまだ完全にはあきらかになっていないと指摘した。

ア・イ・チストズヴォノフは、基調報告のなかには全体として正しい問題提起がふくまれていた、と指摘した。チストズヴォノフの意見によれば、資本主義發生史の問題の分析にさいして第一に提起されなければならないのは、封建地代形態進化的諸問題と、商品生産の發展、都市における資本主義の發展の問題である。資本の蓄積過程と私的資本主義的形態の發生過程はつねに都市においてははじまり、都市における經濟的發展が農村における經濟的發展のあゆみのうえにその影響をおよぼすのである、とチストズヴォノフはのべた。

エリ・エル・ゴルドン・ポロンスカヤは、ヴェ・イ・パヴロフの報告のいくつかの命題を批判した。とくに彼女は、報告者および他の若干の討論参加者たちは、国家的土地所有の問題に

たいして不当に大きな注意をあたえたと指摘した。発言者の意見によれば、あたらしい諸関係の発展といろいろの種類の私的所有の交代とを直接的な依存関係におくことはできない。

ア・エス・トヴェリチノヴァの発言では、東洋諸国の社会経済的發展過程の研究にさいしては、西洋にとってもまた東洋にとっても特徴的な一般的法則性が考慮されなければならないと強調された。しかし、社会経済的發展の一般的特徴と法則性、そして特質を分析するにあたっては、年代的に対比しうるもののなかで比較をおこなわなければならない。東洋諸国にたいする資本主義的西洋の影響にかんする問題にふれて、ア・エス・トヴェリチノヴァは、西洋では封建制度の解体、したがってまた資本主義の発生とむすびついた諸過程全体が自由に妨害なしにおこなわれたが、東洋ではこれらの諸過程は緩慢にしかおこなわれなかった、なぜならば、西洋資本が、歴史的にすたれた封建的諸制度の保存を決定的に促進したからである、と強調した。

ヴェ・イ・パヴロフ（ゴチックは訳者）はその結語のなかで、エス・デ・スカスキンによって提起された問題に回答した。報告者の意見によれば、東洋諸国においては資本主義の自生的發展が存在していたのではなく、東洋諸国の内的發展過程全体によって準備された資本主義諸要素の発生が存在していたのである。いうまでもなく、東洋における原始的蓄積の過程にかんしては報告者は、インドについて自分の意見をのべることができ

たにすぎない。彼の考えるところによれば、インドではこの過程は、一九世紀の七〇―八〇年代に展開したが、しかしインドの植民地的隷属とむすびついた一連の諸原因によって、それは完成されずに今日まで継続している。報告者は、インドではマニファクチュア時代が存在しなかったということをつたたび強調した。

おわりにエス・デ・スカスキンが発言したが、彼は、討論が多数の興味深い論争問題をあかるとみにだしたことについて満足の意味を表明した。

——『東洋諸国における資本主義の発生史について』（東洋図書出版所、モスクワ、一九六二年）、四一六―四二三ページ——

〔山口大学 福富正実 訳〕